

対格動名詞の格付与について

白木佳帆

0. 概要

本稿では、英語における対格動名詞の統語構造に関して、対格動名詞節が非顕在的に名詞化されていると主張する。対格動名詞は TP や CP といった節の構造を持つと考えられている。一方、CP である定形節と対格動名詞は異なるふるまいをする。この対比に関して、本稿では Kastner (2015) の Selected Embedded Presuppositional DP complements に対する分析を対格動名詞に適用可能か検討し、対格動名詞は非顕在的な DP によって導かれる構造を持つと提案する。また、この構造を用いて、その他の構文とのふるまいの違いを分析する。

1. 導入

英語の動名詞には、名詞的動名詞と動詞的動名詞の二種類が存在する。動詞的動名詞は前置詞 *of* の介在なしに目的語をとり(1)、叙実動詞の補部になる(2a)。

- (1) Mary's winning the contest was a big surprise.
- (2) a. Everyone ignored John's being completely drunk.
b. *He avoided John's getting caught.

さらに動詞的動名詞は、節内の主語が対格をとる対格動名詞(3a)と、所有格をとる所有格動名詞(3b)に分類される。

- (3) a. We remember him describing Rome. (対格動名詞)
b. We remember his describing Rome. (所有格動名詞)

本稿では(3a)の対格動名詞に焦点を当て、その構造や格付与について考察する。

2. 先行研究

2.1. Kastner (2015)

Kastner (2015)は、叙実動詞が取る補部 (Selected Embedded Presuppositionals (以下 SEP)) は、非顕在的な D である Δ が CP を選択する DP 構造を持つと主張している(4b)。

- (4) a. Bill remembers that John stole the cookies.
b. Bill remembers [DP Δ [CP that [TP John stole the cookies.]]]

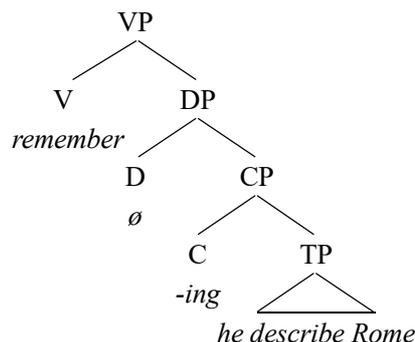
2.2. null D

Tanigawa (2018)は、主語位置に現れる *that*-clause (Sentential Subject) が一致を示す事実から、これが非顕在的な D (null D) に率いられた DP であることを提案している。また、Takahashi (2010)は、ギリシャ語の冠詞付き *that*-clause を証拠に、D が CP を選択する構造の通言語的な普遍性を主張している。

3. 提案

対格動名詞は叙実動詞の補部となるため、Kastner の SEP に対する分析を適用し、以下の非顕在的な D を持つ DP 構造であると仮定する(5b)。また、Tanigawa (2018)に基づき、この null D は[uCase]素性と[ϕ]素性の両方を持つと仮定する。

- (5) a. We remember him describing Rome.
b.



4. 分析

4.1. 対格動名詞への格付与

対格動名詞は主語位置(6a)や目的語位置(6b)、前置詞の補部(6c)といった格位置に現れる。

- (6) a. We remember him describing Rome.
b. Dan kissing Mary bothered her parents.
c. John was afraid of him being hurt.

前節の分析で示したように、対格動名詞が CP を選択する DP であると仮定する。null D が持つ[uCase]素性を満たすために格位置に現れると考えられる。

4.2. 対格動名詞節内の主語の格標示

対格動名詞は、主語位置に生起する場合でも、節内の主語が対格で標示される(7)。

- (7) [Him_i?_k winning the game] was important for every player_k.

この事実に関しては、Schütze (2001)の default Case 分析で説明可能であると考えられる。対格動名詞節内の T は非定形であり格付与能力を持たない。そのため、統語的に決定できない対格動名詞節内の主語の格は、英語の default Case として対格で標示されることが考えられる。

4.3. 所有格動名詞との比較

対格動名詞は虚辞の生起(8a), (9a)や文副詞の生起(10a)を許容する一方で、所有格動名詞では非文法的となる。

- (8) a. It being possible that the Rams will sweep is staggering.
b. *Its being possible that the Rams will sweep is staggering.
(9) a. There being no beer was a nightmare.
b. *There's being no beer was a nightmare.

虚辞は T の EPP を満たすために挿入されることから、対格動名詞は TP 以上の構造を持つと考えられる。

- (10) a. Mary probably being responsible for the accident was considered by the DA.
b. *Mary's probably being responsible for the accident was considered by the DA.

文副詞は CP に生起することから、対格動名詞は CP 以上の構造を持つと考えられる。

4.4. *that*-clause との比較

CP として分析される *that*-clause とはふるまいが異なり、対格動名詞は格位置に現れる(11a)。

- (11) a. Mary talked about [John moving out].
b. * Mary talked about [(that) John moved out].

この事実は、対格動名詞が[uCase]を持つ DP であると考えられると説明が可能である。

4.5. 等位接続

対格動名詞は(12)のように通常の名詞句 (DP) や、(13)のように *that*-clause との等位接続が可能である。

- (12) John preferred [DP destroying an existing notion] and [DP creation of a new idea].
(13) I remember [DP you winning the lottery] and [that your family roared with joy].

(12)は DP と DP の等位接続であると考えられ、対格動名詞が DP であることを支持する。(13)についても、Kastner (2015)に基づき、叙実動詞の補部である *that*-clause が対格動名詞と同様に null D を伴う DP であると仮定すれば、等位接続の説明が可能である。また、(13)については、Category Mismatch の可能性も考えられ、今後の研究課題の一つである。

主要参考文献 Abney, Steven P (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT. / Kastner, Itamar (2015) "Factivity Mirrors Interpretation: The Selectional Requirements of Presuppositional Verbs," *Lingua* 164, 156-188. / Pires, Acrisio (2006) *The Minimalist Syntax of Defective Domains: Gerunds and Infinitives*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam. / Sato, Ryosuke (2019) "Clausal Gerunds and Labeling," *English Linguistics* 36, 48-68. / Schütze, Carson T (2001) "On the Nature of Default Case," *Syntax* 4, 205-238. / Shimokariya, Sho (2017) "On the Nature of Clausal Gerunds," *English Linguistics* 33: 2 415-444. / Takahashi, Shoichi (2010) "The Hidden Side of Clausal Complements," *Natural Language & Linguistic Theory*, 28, 343-380. / Tanigawa, Shin-ichi (2018) "Agreement, Labeling and Sentential Subjects," *English Linguistics* 34, 302-330.